

中二病を拗らせた結果、
天才攻魔師を演じるこ
とになりました

ねっむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔術や異能が実在する世界で意味深発言をしていたら、いつの間にか攻魔師として戦うことになってしまった少年。中二病全盛期にやらかした黒歴史が襲いかかる。少年は生き残ることができるのか!?

ある程度のプロットはありますが、続くかは人気次第です。

目次

プロローグ	1
プロローグ 2	8

プロローグ

諸君は魔法がある世界では中二病が発生すると思うだろうか？いくつか条件が付くが、俺の答えはイエスだ。なぜなら、中二病の本質とは承認欲求だからだ。人は誰もが大人なり小なり心の隅で特別を追い求めている生き物だ。その欲求が、子供特有の無知と純粹さ、そして想像力によって現出した結果、中二病と呼ばれる症状になる。

さて、なぜこんなことを語っているかと言えばまさに俺が異能がある世界に転生し、バツチリと中二病になったからだ。

今思い出すだけでも黒歴史だが、これを語らずにはいられない。俺が生まれた世界は魔術や異能といった力が当たり前になっている世界だった。しかし、その副作用とすべきか魔道災害と呼ばれる災害が多発し、魔物やゴーストが跋扈する物騒な世界だった。世界観は割とポストアポカリプスよりで、魔道災害で滅びかけの国はあるし、魔道犯罪者や魔物に対抗するための攻魔師という仕事まである。

そう、この世界は物騒だ。しかし、世界中が危険というわけではなく攻魔官たちがいるお陰で平和な地域が多く存在する。ありがたいことだ。だが、中二病の絶対条件は平和なのだ。平和故に刺激を求め、危機感がないが故に他人や世界を救う妄想や悪の組織

なんて妄想をする。そして、転生したが故に俺の危機感はこの世界の人間よりも緩かった。

これを悟ったときにはもうすべて遅かった。いつの間にか俺は、最高ランクの攻魔官に担ぎ上げられ、その上よくわからない組織の潜入任務なんてものを日本政府にやらされる羽目になった。

ことの発端は、3年前。東京を襲った魔道災害の半年後。復興支援に気まぐれで行っていた俺はそこである女と出会った。

俺は壊れかけたビルの屋上に佇んでいた。当時の俺は13歳。中二病真つ盛りの高に痛い奴だったので、白いフードを被って片目に眼帯をしていた。俺の足元に広がる海面は月光を反射してまるで夜空のようにも見えた。そして暗く透明な海の底には巨大な廃墟が沈んでいた。俺はその水底の街を独りきりで見つめていたのだ。

「こんなところで何をしている」

二人組の男女が話しかけてきた。凄まじく怪しげな二人だった。女の方はフリルまみれの豪華なドレスを着た小柄な少女だった。人形を思わせる美しい顔立ちに長い黒髪。深夜だといふのになぜか日傘をさしていた。若いというよりは幼いと形容すべ

き顔立ちだ。男の方は、全身を黒スーツで着飾っていた。この時俺は、二人に同種の気配を感じてしまったのだ。

「少女の悲恋と男の妄執に黙祷しているんだ」

完璧にお仲間さんだと思った俺は、クソ意味の分からないセリフを訳知り顔で吐いた。しかし、その瞬間男の方の顔色が変わった。

「お前……どこまで知っている？」

完全に乗ってきてくれたもんだと思った俺は

「すべて」

と返した。そして続けて

「見たくもないものまで見えるからな」

俺は振り返り返りもせずにもうつぶやいた。

「そうか……その忌まわしき力はやはり継承されていたのか」

男の後に少女が言葉をつなぐ。

「一つ——お聞きしても？」

「何だ？」

「この光景を視ておきながらここに来たという認識でよろしいのでしょうか？」

少女が口元に笑みを浮かべる。後に知ったが、自分たちがここに来ることを知っている

た、つまり戦闘になる可能性も覚悟していたということだと判断したようだ。

「ご想像に任せる」

【煉獄の業火よ】

スーツの男は灼熱の炎を纏った鋼色の剣をいつの間にか手に握っていた。膨大な魔力が大地を揺らし、周囲の海面を激しく波立たせた。俺は思わず感嘆の吐息を漏らす。あまりにも見事な魔力制御だったからだ。それと同時に、違和感を覚えた。興が乗ったにしては、目が本気だったからだ。

結論から言えば男はそのまま俺を攻撃してきた。そして、俺の命を救ったのは、俺が格好をつけるためだけに作った使い勝手の悪い魔術と偶然だった。男の攻撃が俺を襲うその瞬間、俺は反射的に右手を掲げその攻撃を無操作に振り払いのけていた。自らの攻撃と同等の衝撃を浴びて炎をまとった剣が折れる。激突の余波に男が呻いた。

動揺する男を無表情に見返して俺は困惑を隠して、言い放った。

「遊びはこの辺にしよう。ここで争うのはあまりにも不謹慎だ。今のじゃれあいは忘れろ。とりあえず、自己紹介でもどうだ？」

マジで危なかった。俺が先輩にせがんでコレをストックしていなかったら死んでいたぞ？ごっこ遊び中の事故で死んだらシャレにならない。

月明かりが眩しいなど思ったら、先ほどの爆風でフードがめくれたせいで俺の素顔が

露になっていた。俺はなんだか急に気まずくなり、フードを被りなおして少女を見つめる。

「ッー！」

先ほどまで黒かった少女の髪は、腰まで届く長い金髪に変わっていた。そして、少女の大きな瞳は炎のように赤く輝いていた。ランランと輝くその表情はまるで新しい玩具を見つけた子供だった。

くふつと小さく息を漏らして少女は、幼い子供のように無邪気に笑ってみせる。その後、隣で呆然とシヨックを受けている男に声をかける。

「貴方がこゝも手玉に取られたのは、Aランクになってから初めてですね？」

「……………」

呆然とする男に少女は上品かつ邪悪な笑みをぶつける。いったい何がおかしいのだろうか？

「さて、自己紹介でしたね？私の名前はメリア、彼はスノーデン。貴方のお名前は？」

「詩音だ。逆空詩音」

「では、シオン。我々の仲間になりませんか？」

メリアは柔らかな笑みを浮かべて、俺に手を差し出した。

これが始まり。後に俺はこの場で手を取ったことを後悔することになる。なぜなら、ここでメリアたちと出会ったのは、偶然ではなく先輩の思惑だったからだ。メリアたちは、攻魔師協会の幹部でありもう尋常じゃないくらいに俺のことを買い被っている。もはや信頼という名の脅迫だ。

俺にこの復興支援バイトを紹介した先輩は、凄まじい才能を持っており自分の未来を見ることができるといふ。成績はいつもトップだし、俺に魔術を教えてくださいました。先輩は超が付くほど気分屋で、面倒くさがりで、猫みたいなののため、お堅い仕事はしたくないとのこと。いずれ、攻魔師協会の幹部にスカウトされる未来を見てしまった先輩は、俺を身代わりにして得ようとしたらしい。

『私は面倒事から逃げられる。君は刺激的な毎日を送れる。ね？利害は一致しているでしょ？あ、ちなみにメリア・クライツの素顔は機密事項だから、やめますって不用意に言うて殺されちゃうかもだから』

『え？』

『大丈夫、君は私に比べるとゴミみたいなレベルの魔術しか使えないけど、相手を誤魔化す演技と意味不明な発想はピカ一だから何とかなるよ！』とかこれが最適解だし』

『いや、そういう問題じゃ……せ、先輩？』

『もしもの時はこれ使つてね？天才な私君のために作ったさいきよーの武器だから。あ、あとわかつてると思うけど私のことは言わない様に。大丈夫、5年過ぎれば丸く収まるから』

そう言つて、先輩は姿を消した。まあ、ここまでの流れを端的かつ分かりやすく言うのであれば、『中二病を拗らせた結果、天才攻魔師を演じることになりました』かな？すげー、頭の悪いライトノベルみたいだ。

プロローグ2

月曜日。少し憂鬱な一週間の始まり。この世界の月曜日でも、多くの人間が頭を抱えたため息を吐く。そして俺が吐いたため息は、ここ一か月の中で一番深いと思うほどだ。時刻は、8時10分。

通常であれば高校の通学路を歩いている時間だが、乗車している窓から見える街並みは全く見慣れないものだ。それもそのはずだ。今、俺が座っているのは攻魔師協会の人間が運転する車の助手席だからだ。景色が違うのも当然だった。昨日の夜、学校から帰ると担当者から電話があつて、「メリア様からの緊急の招集なので、朝を迎えに行きませう」という話になった。

瞳に不満を溜め込んで、後部座席を振り返る。そこにいたのは、俺を呼び出した直属の上司メリアその人だった。

「何で俺を呼び出しておいて本人が車に乗ってるんだ？」

「貴方を驚かせたかったから、では駄目でしょうか？」

「ダメだな」

「気になるのであれば、視ればいいのではないのですか？」

「……………何でもかんでも視れると思うな」

両目に映る街並みは見慣れた光景へ変わっていく。正面に見えてきたのは、攻魔師協会、日本支部の本拠地だ。

「では朝食を食べたら、会議室に集合してくださいね」

メリアはそう言い残し去っていった。俺はため息を吐いて、攻魔師協会の食堂に顔を出した。

朝の時間だけあつて人は、片手で収まる人数しかいない。だからだろう。その見覚えのある後姿が目にとまったのは。

若草色の髪をしている少女はほとんどいない。それは所属が違うのになんだかんだで長い付き合いの後輩だと推測できた。

「座つていいか?」夏音

四人がけのテーブルを一人で使っている少女に正面から近づいて声をかけた。うどんを口に入れたまま夏音は顔を上げた。そして、じゅるりと吸い込んでもぐもぐ口を動かしていた。最後にゴックンと飲み込むと

「嫌ですけど」

つとわざとらしい口調で唇を尖らせる。

「まあ、何と言われても座るんだけどな」

俺はその返答を真に受けず正面に座った。夏音とはメリアと同じくらい付き合いがあるため、その性格は理解している。気を使っていたら、こっちが持たないのだ。

「先輩みたいなサボリ魔が協会に顔を出すのは珍しいですねー？でもでもこの時間に来たのは納得です。一緒に来る相手がいないんですもんねー？相変わらずのぼっちですかあ？」

「見ての通り、可愛げのない後輩と二人だ」

あいさつ代わりに皮肉を打ち返して、あらかじめコンビニで買っておいたサンドイッチを広げて口に運ぶ。

コンビニでサンドイッチを買っておいたのに食堂に足を運んだのは、ここに来れば暖かいお茶をサーバーから自由に飲めるからである。夏音とのエンカウントは予測外だったけど。

「可愛げのない後輩も今日は一人か？」

顔を合わせた回数は数えるほどしかないが、彼女の周りには同僚もしくは補佐官がいとも一緒にいたはずである。

「はあ？私ほど可愛い後輩なんてこの世に存在しないと思うんですけど?!?!」

「容姿だけならな」

ただ、メリアや先輩を知っていると少し霞んでしまうだろう。若草色の長髪に創作物

じみた完璧に近い容姿。その宝石のような瞳は桜色に煌めき、艶やかな唇には無意識のうちに視線を持つていかれるほどだ。

しかし、メリアや先輩のような人外じみた魅力はない。

それに、なにより性格がよろしくない。

「可愛げがないんだよな」

「先輩に可愛げとか言われたくないです」

拗ねたようにそっぽを向く夏音。しかし、一瞬でその表情を変えて笑う。

「ああ、今日は一人なのかでしたっけ？ 見ての通り尊敬できない先輩と二人です」

うわー、その返答はうざい。夏音は悪戯っぽい笑みを浮かべて、使った食器を返却口

へ返しに行く。

さて、そろそろ俺も行くかな。

「そろそろ時間なのに、全然いないじゃない」

攻魔師協会の会議室。その一室に円卓を囲み、3人の少女が座っている。ニコニコと笑みを浮かべているメリアは、少女という年齢ではないが。

「来ていないのは、シオンと今日紹介する予定の新人、ココアさんですね」

「はあ？新人のくせに時間ギリギリにしか来ないってどういうわけッ」

「フフ、どうということなんでしようね？」

「何で楽しそうなのよッ！」

不機嫌さを孕んだ声が響く。声の主である猫耳フードの少女がメリアに視線を向ける。寝不足なのか、目元にできた隈が彼女の体調を明確に示していた。メリアは、別段臆することなく少女の怒気をスルーして話を進める。

「シオンはもうすぐ来るでしょう。七瀬、ココアさんはどこにいるかわかりますか？」

メリアの視線が、黒い髪にバラ色のリボンをした少女に注がれる。少女は、スーツを着こなし凛とした雰囲気を漂わせており、できる女という感じだ。

「はい、竜胆はすでにこちらに向かっているようです。逆空さんに関しては、感知できません」

七瀬は事前に新人の情報を得ていたのか、メリアの注文通りに建物内の魔力を感知する。

「フンッ！時間ギリギリにしか来ないなんて、話にならないわね。特にあの男！自分以外には興味ありません見たいな顔して、イライラするのよね！この間なんて、わざとアタシに自分の獲物を仕留めさせて手柄を譲ってくるなんて何様のつもりよッ！」

猫耳フードの少女こと、茉莉の暴言に七瀬が顔をしかめた。

「寝不足なら寝ていなさい。それと、逆空さんへの侮辱は許しません」

「あら？アタシは一度だつて男のことを逆空だとは言つてないわよ」

空気が淀んでいく。通常の人間であれば、帰りたくなつているところだがこの場にいらる傍観者メリアは愉快そうに二人を眺めている。

「成人した女が未成年の男に執着してるのつてどうなのかしら？シヨタコンつてやつう？」

茉莉の発言に笑みが引きつっていく七瀬を見ながら、メリアは自分の周囲に魔力でできた障壁を展開した。

茉莉は七瀬の引きつった笑みを見て満足げに腕を組んだが、次の瞬間に強烈なカウスターを喰らうことになる。

「茉莉さんこそ、まだお子様とは言え15歳の高校生が猫耳パーカーだなんて痛くて笑えないですね。あ、ごめんなさいね。歳は15歳でも嗜好はお子様でしたね？部屋の数いぐるみの数は増えましたか？服は未だにドレスばかり？メリアさんのように似合うのならいいのですが、目つき悪めのショートサイズヤンキー女には着こなせるものじゃないのね」

普段の茉莉ならその場で言い返したであろう。この程度で手が出るほど子供ではなかった。だが、寝不足で極限まで思考が鈍った彼女の沸点はかつてないほど低かった。

「……………クロス」

暴風と共に深紅色のケルベロスが召喚される。スナイパーである彼女が中距離戦で愛用する従魔を見て、メリアは少し困った顔で眉を下げる。

「この部屋…壊れてしまいそうですね」

「こんな閉鎖空間で従魔を出すなんて！いくら何でもやり過ぎよッ！」

「うっさい！おとなしくやられるのね！」

メリアのつぶやきを両者の怒号がかき消す。ケルベロスが主の怒りに呼応し、七瀬への攻撃を始めようと爪を振り上げた。だが、その前に七瀬の口からは厳かな祝詞が漏れ出していた。

「偉大なる我が神に境界の巫女たる我が願い奉る。刃を以て汚れを防ぎ給え！」

もはや美しいと表現できるほどの淡い光をまとった魔術式が刀身を包む。

それはあらゆる不浄を切り裂き無効化する浄化の光。その光を見た茉莉は不愉快そうに舌打ちをして、命令を下す。

「あの女をぶっ飛ばしてッ」

茉莉の瞳の輝きが増し、濃密の魔力の奔流が大気にあふれた。

同時に刀身から漏れ出した光が不可視の壁を生成する。不可視の壁と赤黒い魔力と衝突し、大気を揺らす。

「グッ！」

七瀬が苦しげに息を吐いた。不可視の障壁は、会議室に衝撃が行かない様に四方を覆う形で展開されていた。

自分の負担を度外視して、会議室とメリアを守ろうとした七瀬の行動に拍手を送ったメリアは感嘆するように息を吐いた。

そして彼女は畳んだ日傘の先端を無雑作に七瀬と茉莉に向けた。

「そこまでですよ」

空間が歪む。虚空から吐き出された黒色の巨大な腕が二人の全身をつかんで拘束した。メリアが冷え冷えとした視線を茉莉と七瀬に向けた。二人は体をよじるが、メリアが召喚した黒い腕は振りほどけない。

「お二人ともはしゃぎ過ぎです。減俸されたいのですか？それとも、また私が可愛がってあげましょうか？」

その言葉に二人は固まり大人しくなる。そのタイミングで扉が開いた。

歓声が嫌いだ。それは自分に最強を強いるものであり、嘘をつくことを日常にさせたものだから。

虚像が自分を殺し成り代わっている。そんな現状をどうして好きになれるのだろうか。

俺が最強の攻魔師として名を上げるきっかけとなったのは3年前。メリアと出会って5日後の話だ。

前提として、俺には魔術の才能があまりない。人並くらいにしか使えないのである。それでも、戦いは魔術の才能だけでは決まらない。だからやり様はあった。しかし、中二病全盛期の俺は、格好良さと圧倒的な才能に由来した魔術の強さに憧れてしまったのである。

結果、俺は非効率のかつ狂気的な一つの魔術を作り上げた。

『5つの憧憬』と呼ばれるこの魔術は、魔力に由来する事象を固定し一時的に所有できるというものである。わかりやすく言えば、魔術をストックできるといふことだ。自分では使用できない魔術をストックし、任意のタイミングで開放できる。5つをストックできる。代わりに俺は、無属性の魔術以外を扱えなくなった。これが、5つの憧憬のデメリットだ。

つまるところ、俺は意味深な発言をしつつ自分では扱えないぶっ壊れ性能の魔術を行って遊んでいたのである。

話を戻そう。3年前、俺はこの魔術と先輩の計画によって地形を変えるほどの魔道災害を鎮圧してしまったのだ。

俺の力じゃない、そう言いたかったが気が付けば神輿に担ぎ上げられ後には引けない状況になっていた。俺が強くないと知れたら、恨まれている連中に殺されてしまう可能性もあつたが故に余計に引けなかった。

ただ、問題はここからだ。5つの憧憬はストックを補充しない限り五回しか使えない。しかし、攻魔官としての仕事は年に5回どころではない。先輩を含めた事情を知る協力者に会えるのは年に数回、魔術の補充はその時だけ。解決策として、先輩は俺にとある従魔を貸し与えた。

日本に三体しかない神獣、『八咫鳥』。神獣とは従魔の中でも最強の魔獣であり、かつて魔道災害であつたそれを鎮め封印していた巫女から譲り受けたらしい。

神獣は魔道災害の一種である魔獣に分類される怪物だ。通常は魔獣は殺すものだ。しかし、一部の魔獣を有用かつ利用可能だと判断し生け捕りにすることは稀にある。そういう魔獣を自分の使い魔として使役する攻魔師を召喚術師と呼び、彼らが20年間屈服させられなかった魔獣を神獣と呼ぶ。

表向きは、契約者である俺は凄まじい腕の召喚術の使い手だと評価されているというわけだ。

そんな八咫鳥君だが、俺の言うことは一切聞かないのである。先輩の指示通り、俺を守るだけで、敵さんは放置。気まぐれで反撃してくれるが、タイミングと威力はその時々次第である。

さて、長々語ってしまった。結論を言おう。

俺は、攻魔師としての仕事が嫌いだ。